

而用焉、時罷、鋤田寺而往、儻得⁷痢病、經一月計、臨⁸命終時、誠⁹弟子曰、我死莫燒、九日¹⁰置而待、學生問我、答之、心曰、有緣東西、而留供養、慎勿¹¹知他、弟子受教、閉師室戶、不令¹²知他、而竊¹³涕泣、屋夜護闔、唯待¹⁴期日、學生問求、如¹⁵遺言、答、留供養也、時閻羅王使二人、來召¹⁶於光師、向¹⁷西而往、見之前路、有金樓閣、問是何宮、答曰、於葦原國、名聞智者、何故不¹⁸知、當¹⁹知行基菩薩將來生之宮、其門左右、立二神人、身著²⁰鉀鍬、額著²¹緋纓、使長跪白之曰、召也、問曰、是有²²於葦原水穗國、所謂智光法師矣、智光答曰、唯然、即指²³北方曰、從此道²⁴將往、副²⁵使步前、覓²⁶火非²⁷是、甚熱²⁸之氣、當²⁹身炙³⁰面、雖³¹極熱惱、而心欲³²近就、問何是熱、答、為³³煎汝地獄熱氣、往前、極熱鐵柱立之、使曰抱³⁴柱、光就³⁵抱柱、肉皆銷爛、唯骨環存、歷³⁶之三日、使以³⁷弊簪、撫³⁸於其柱、而言³⁹活々、如⁴⁰故身生、又指⁴¹北將往、倍⁴²勝於先、熱銅柱立、極熱之柱、而所⁴³引患、猶就⁴⁴欲抱、使言⁴⁵抱之、即就⁴⁶抱之、身皆爛銷、逕⁴⁷之三日、如⁴⁸先撫⁴⁹柱、而言⁵⁰活々、如⁵¹故更生、又指⁵²北而往、甚熱火氣、如⁵³雲而覆、從⁵⁴空飛鳥、當⁵⁵於熱氣、而落⁵⁶煎之、問是何處、答、為⁵⁷師煎熬⁵⁸、阿鼻地獄、即至⁵⁹執師、投入⁶⁰燒煎、唯聞⁶¹打鍾音⁶²時、冷乃憩、逕⁶³之三日、叩⁶⁴地獄門、而言⁶⁵活々、如⁶⁶本復生、更將⁶⁷還來、至⁶⁸金宮門、如⁶⁹先白言、將還⁷⁰來之、在于⁷¹宮門、二人告言、召⁷²師因緣、有⁷³葦原國、誹⁷⁴謗行基菩薩、為⁷⁵滅⁷⁶其罪、故請⁷⁷召耳、彼菩薩化⁷⁸葦原國⁷⁹已、將⁸⁰生⁸¹此宮、今垂⁸²來時、故待⁸³候也、慎⁸⁴黃泉竈火物⁸⁵莫食、今者忽⁸⁶還、与⁸⁷使俱向⁸⁸東還來、即見⁸⁹之頃、唯逕⁹⁰九日、蘇⁹¹喚⁹²弟子、弟子聞⁹³音、集⁹⁴会哭⁹⁵喜、智光大歎、向⁹⁶弟子具⁹⁷述⁹⁸閻羅狀、

7 (米) 一

8 副(米) 副

9 覓火(米) 不見火

10 昇(米) 日光

11 使(米) 十ナシ

12 而覆(米) 一覆而

13 阿(米) 何

14 投(米) 燒

15 宮(米) 字

16 泉(米) 十ナシ

17 唯¹准

大懼¹念言、向²於大德、舉³誹⁴妬心、時行基菩薩、有⁵難波⁶令⁷渡⁸椅堀江造⁹船津、光身漸息、往¹⁰菩薩所、菩薩見之、即以¹¹神通、知¹²光所¹³念、含¹⁴咲愛言、何¹⁵罕¹⁶面奉、智光發露懺悔曰、智光於¹⁷菩薩所、致¹⁸誹¹⁹妬心、而作²⁰是言、光者古²¹大德²²債、加以²³智光生²⁴智者、行基沙弥者、淺²⁵識²⁶之人、不²⁷受²⁸具戒、何故²⁹天皇³⁰唯³¹營³²行基、捨³³智光³⁴也、由³⁵口業罪、閻羅王召³⁶我、令³⁷抱³⁸於鉄銅柱、經³⁹之九日、償⁴⁰誹謗罪、恐⁴¹至⁴²余罪⁴³於後生世、是以⁴⁴慚愧⁴⁵發露、當⁴⁶願⁴⁷免⁴⁸罪、行基大德、和⁴⁹顏嘿然、亦更⁵⁰白、見⁵¹大德生⁵²處、以⁵³黃金⁵⁴造⁵⁵宮、行基聞⁵⁶之言、歛⁵⁷矣貴哉、誠⁵⁸知、口傷⁵⁹身之災門、舌剪⁶⁰善之銛劍、所以⁶¹不思議⁶²光菩薩縫⁶³云、饒⁶⁴財菩薩說⁶⁵賢天菩薩過⁶⁶故、九十一劫⁶⁷、常隨⁶⁸姪女腹中⁶⁹生、々已⁷⁰棄⁷¹之、為⁷²狐狼⁷³所⁷⁴食、其斯謂⁷⁵之矣、從⁷⁶此已來、智光法師、信⁷⁷行基菩薩、明知⁷⁸聖人、然菩薩感⁷⁹機緣⁸⁰盡、以⁸¹天平廿一年己丑春二月二日丁酉々々時、法儀捨⁸²生馬山、慈神遷⁸³彼金宮⁸⁴也、智光大德、弘⁸⁵法⁸⁶信教、化⁸⁷迷趣⁸⁸正、以⁸⁹白壁天皇世⁹⁰、智囊蛻⁹¹日本地、奇神遷⁹²不⁹³知界⁹⁴矣、

18 咲(米) 一嘆

19 罕(米) 一罕

20 智(米) 十ナシ

21 大德(米) 德大

22 生智者(米) 智者一 生

23 令(米) 今

24 縫(米) 一縫

25 劫(米) 一却

26 棄(米) 一棄

27 緣(米) 一緣

28 已(米) 一乙

29 々々(米) 十ナシ

30 世(米) 一卅

贖¹蟬蝦命²放³生得⁴現報⁵緣⁶第八

置染臣鯛女者、奈良京富尼寺上座尼法邇之女也、道心純熟、初姪不¹犯、常勤採²菜、一日不³闕、奉供侍⁴於行基大德、入⁵山採⁶菜、見⁷之大蛇、飲⁸乎大蝦、詵⁹大蛇曰、是蝦免¹⁰我、不¹¹免¹²猶飲、亦詵¹³之曰、我作¹⁴汝妻、故幸免¹⁵吾、大蛇聞¹⁶之、高捧¹⁷頭¹⁸、而瞻¹⁹女面、吐²⁰蝦而放、女期²¹蛇曰、自²²今日²³經²⁴七日²⁵而來、然到²⁶期日、閉²⁷屋塞²⁸穴、堅²⁹身居³⁰內、誠³¹如期來、

1 頸(米) 一ナシ

2 堅(米) 一堅

以尾拍壁、女恐明日白於大德、大德住_二在生馬山寺_一、而告之言、汝不得_レ免、唯堅受_レ戒、乃令_二受持三帰五戒_一、然還來道、不知老人、以_二大蟹_一而逢、問之詎老、乞蟹免_レ吾、老答、我振津国兔原郡人、尽問遐邇麻呂、年七十八、而無_二子息_一、活_レ命無_レ便、往_二於難波_一、偶得_二此蟹_一、但有_二期人_一、故汝不得_レ免、女脱_レ衣贖、猶不免可_レ得_レ脱_レ墓贖、老乃免之、然蟹持更返、勸_二請大德_一、呪願而放、大德數言、貴哉善哉、彼八日之夜、又其蛇來、登_二於屋頂_一、拔草而入、女悚慄焉、唯床前有_二跳爆_一之音、明日見之、有_二一大蟹_一、而彼大蛇、条然段切、乃知、贖放_二解報_一恩矣、并受_レ戒之力也、欲_レ知_二虛實_一、問_二于耆老_一、姓名遂無、定委、耆是聖化也、斯奇異之事也、

己作_レ寺用_二其寺物_一作_二牛役緣_一第九

大伴赤麻呂者、武藏国多磨郡大領也、以_二天平勝宝元年己丑冬十二月十九日_一死、以_二二年庚寅夏五月七日_一、生_二黑斑贖_一、自負_二碑文_一矣、探_二之斑文_一、謂、赤麻呂者、壇_二於己所_一造寺、而隨_二恣心_一、借用_二寺物_一、未_レ報納之、而死亡焉、為_レ贖_二此物_一故、受_二牛身_一者也、於_二茲諸眷屬及同僚_一、発_二慚愧心_一、而慄_二無_レ極_一、謂、作_二罪可_レ恐_一、豈心_二無_レ報_一矣、此事可_レ録_二季葉楷模_一、故以_二同年六月一日_一、伝_二乎諸人_一矣、冀_二無_レ慚愧_一者、覽_二乎斯録_一、改_レ心行_二善_一、寧_二飢苦所_一迫、雖_レ飲_二銅湯_一、而不_レ食_二寺物_一、古人諺曰、現在甘露、未來鉄丸者、其斯謂_二之矣_一、誠知、非_二無_レ因果_一、不_レ怖_二慎_一歟、所以大集經云、盜_二僧物_一者、罪過_二五逆_一云々、

3 堅_レ采_一堅4 令_レ采_一全5 詎_レ采_一誰6 還_レ采_一ナシ7 呂_レ采_一石8 便_レ采_一使9 復_レ采_一後10 脱_レ采_一境11 爆_レ采_一爆12 老_レ采_一宛1 而_レ采_一ナシ2 録_レ采_一報3 業_レ采_一業4 寧_レ采_一寛5 飲_レ采_一飲6 説_レ采_一説7 歟_レ采_一歟常鳥卵煮食以現得_二惡死報_一緣第十

和泉国和泉郡下痛脚村、有_二一中男_一、姓名未_レ詳也、天年邪見、不_レ信_二因果_一、常求_二鳥卵_一、煮食為_二業_一、天平勝宝六年甲午春三月、不_レ知_二兵士_一、來告_二中男_一言、国司召也、見_二兵士腰_一、負_二四尺札_一、即副共往、纔至_二郡内_一於_二山直里_一押_二入麦畠_一、々々一町余、麦生_二二尺許_一、眼見_二燭火_一、踐足無_レ間、走_二廻畠内_一、而叫哭曰、熱哉々々、時有_二当村人_一、入_二山拾薪_一、見_二於走廻_一、哭叫之人、自_二山下来_一、執之而引、拒不_レ所_レ引、猶強追捉、乃從_二離之外_一、牽之而出、隣_二地而臥_一、嘿然不_レ言、良久蘇起、然病叫言、痛足矣云々、山人問言、何故然也、答曰、有_二一兵士_一、召_二我将来_一、押_二入燭火_一、燒_二足如_レ煮_一、見_二四方_一者、皆衝_二火山_一、無_レ間_二所_一出、故叫走廻、山人聞之、囊_二袴見_一、膊、々肉爛、其骨壞在、唯逕_二之一日_一而死也、誠知、地獄現在、応_二信_一因果、不_レ可_レ如_二鳥_一、鳥慈_二己兒_一、而食_二他兒_一、無_レ慈悲者、雖_二人如_レ鳥矣_一、涅槃經云、雖_二復人獸尊卑差別_一、宝_二命重_一死、二俱無_レ異云々、善惡因果經云、今身燒_二煮_一鷄子、死墮_二灰河地獄_一者、其斯謂_二之矣_一、

1 天_レ采_一其2 札_レ采_一於3 牽_レ采_一事4 業_レ采_一塞5 唯_レ采_一准6 復_レ采_一得7 獸_レ采_一教8 其斯謂_二国_一其斯謂_二來_一斯謂_二一其謂_一罵_二僧与邪姪_一得_二惡病_一而死緣第十一

聖武天皇御世、紀伊国伊刀郡奈原之狹屋寺、尼等発_二願_一、於_二彼寺_一備_二法事_一、請_二奈良右京藥師寺僧惠惠師_一、字曰_二依綱_一、俗姓依綱、故以為_二字_一、奉_二仕十一面觀音_一、悔過、時彼里有_二一

1 刀_レ采_一力2 綱_レ采_一堀

蟬と蝦との命を贖ひ生を放ちて現報を得る縁 第八

置^一染^二臣^三鯛^四女は、奈良京の富尼寺の上座の尼法邇^五の女なり。道の心純熟^六りて、初^七姪^八を犯さず。常に懇^九に菜^十を採り、一日^{十一}闕^{十二}けず奉^{十三}供^{十四}りて行基大徳^{十五}に侍る。山に入り菜を採り、大蛇の大蝦^{十六}を飲むを見る。大蛇に逃^{十七}へて曰^{十八}はく「是の蝦を我れに免^{十九}せ」といふ。免^{二十}さずしてなほ飲む。また逃^{二十一}へて曰^{二十二}はく「我れ汝が妻と作らむ。故に幸はくは吾れに免^{二十三}せ」といふ。大蛇聞き、高く頭頸^{二十四}を擡^{二十五}げて女の面^{二十六}を瞻^{二十七}り、蝦を吐^{二十八}きて放^{二十九}つ。女蛇に期^{三十}りて曰^{三十一}はく「今日より七日を経て来れ」といふ。然^{三十二}うして期^{三十三}れる日に到^{三十四}りて、屋を閉^{三十五}ち穴を塞^{三十六}ぎて身を堅^{三十七}め内に居る。誠に期^{三十八}れる如く来^{三十九}りて尾を以^{四十}ちて壁を拍^{四十一}つ。女恐^{四十二}り、明日に大徳に白^{四十三}す。大徳生馬山寺^{四十四}に住^{四十五}みたまひて、告^{四十六}げて言^{四十七}はく「汝免^{四十八}さるること得^{四十九}す。ただし堅く戒を受けよ」とのたまふ。すなはち三^{五十}帰^{五十一}五^{五十二}戒^{五十三}を受^{五十四}持^{五十五}たしめたまふ。然^{五十六}うして還^{五十七}来^{五十八}る道に、知らぬ老人大蟹^{五十九}を以^{六十}ちて逢^{六十一}ふ。問^{六十二}ひてはく「詎^{六十三}の老^{六十四}ぞ。乞^{六十五}はくは蟹を吾れに免^{六十六}せ」といふ。老答^{六十七}へてはく「我れは攝津国^{六十八}曳原郡^{六十九}の人、尽問^{七十}還^{七十一}麻呂^{七十二}なり。年七十八にして子息無^{七十三}し。命を活^{七十四}くるに便^{七十五}無^{七十六}し。難波^{七十七}に往^{七十八}きて

偶^一に此の蟹を得^二たり。ただし期^三れる人有^四り。故に汝に免^五さす」といふ。女衣^六を脱^七きて贖^八ふ。なほ免^九可^十さず。また蟹を脱^{十一}きて贖^{十二}ふ。老^{十三}すなはち免^{十四}す。然^{十五}うして蟹を持ちて更^{十六}返^{十七}り、大徳を勧^{十八}請^{十九}へて呪願^{二十}せしめて放^{二十一}つ。大徳歎^{二十二}めて言^{二十三}はく「貴^{二十四}きかな。善^{二十五}きかな」とのたまふ。彼の八^{二十六}日の夜にまた其の蛇来^{二十七}る。屋の頂^{二十八}に登^{二十九}りて草を抜^{三十}きて入^{三十一}る。女悚^{三十二}慄^{三十三}る。ただ床の前に跳^{三十四}ち爆^{三十五}く音有^{三十六}り。明日に見^{三十七}れば、一の大蟹有^{三十八}りて彼の大蛇を条^{三十九}然^{四十}に段^{四十一}切る。すなはち知る、贖^{四十二}ひ放^{四十三}てる蟬の恩を報^{四十四}ゆることを。并に戒を受けたる力なることを。虚^{四十五}実^{四十六}を知らむと欲^{四十七}ひて耆老を問^{四十八}へば、姓名遂^{四十九}に無^{五十}し。定^{五十一}めて委^{五十二}る、言^{五十三}は是^{五十四}れ聖^{五十五}の化^{五十六}なることを。斯^{五十七}れ奇^{五十八}異^{五十九}しき事^{六十}なり。

己れ寺を作り其の寺の物を用て牛と作り役はる縁 第九

大伴赤麻呂^一は、武蔵国多磨郡^二の大領^三なり。天平勝宝元年^四己丑^五の冬十二月^六の十九日^七に死^八ぬ。二年^九庚寅^十の夏五月^{十一}の七日^{十二}に黒斑^{十三}なる瘤^{十四}生^{十五}る。自^{十六}づから碑文^{十七}を負^{十八}ふ。斑の文を採^{十九}るに、謂^{二十}はく「赤麻呂は、己れが造^{二十一}る所の寺を

第八縁 善業についての現報説話。三空經・法十三に引用。

一未詳。本説話以外に所伝をみな。行基の登場する説話で、女が重要な役柄をはたしているものは、本説話以外に中巻三縁、十二縁、二十九縁、三十縁。二隆福尼院。行基の四十九院のひとつとして、大和国桑田郡登美郷(奈良市)に天平三年(七三二)に建立。三綱(上座、寺主、都維那)のひとつ。寺を統括する職。四未詳。本説話以外に所伝をみな。鯛女は、在俗の時に生れた娘であらう。五行基の粥食に供されるのであらう。六男子の在家信者が著生と交わることは邪正とされた(優婆塞戒經・業品)。女子の在家信者の娘はいも同様であらう。不邪淫戒を犯すかのごとき約束である。このような約束によつて蝦を救ひ蝦は報恩して女を救う、というのが昔話の型。「戒を犯すような約束をして」蝦を救つても問題は何も解決しない、ということが本説話の展開によつて示される。蝦が報恩しないことに注目すべきであらう。マ生馬院。生馬仙房とも。行基の四十九院のひとつとして慶雲四年(七三三)までに建立。奈良県生駒市の竹林寺の地に所在したか。ヘ上文の不邪淫戒を犯すかのごとき約束をした罪が許されるための方法。改めて放生と報恩の説話が語られることされなければならない。ハ仏、法、僧に帰依し、在家信者の守るべき五戒(不殺生戒、不偷盜戒、不邪淫戒、不妄語戒、不飲酒戒)を受ける。誓約の儀式をおこなつて受ける。ニ兵庫縣屋島市、神戸市あたりに建立。嵯原親王治には行基の四十九院の船慧院、同尼院が天平二年(七三〇)に建立されている。ニ底本「尽問還麻呂」。「尽問」は、問を音仮名と解して「つく」と訓む。意は未詳。あるいは「つくも髪(伊勢物語・六十三にみえる)の略で老人をあらわすか。「還麻呂(名を還)」は、「還還」の熟語を念頭に置いて「還」を補つて「かにまろ」とする。老蟹を想起させる名」と解する。三蟹を与えることを約束した人がいる。四施主(本説話のはいは鯛女)に仏の利益が到来するように祈願すること。傳勸請呪願放生と述べられる例は、中巻十二縁、十六縁。「以傳令呪願ス、水に放也(宣寺縁事抄・十三所引放生会縁起)」。五とびはねる。米忌院本訓「アツチハタラク(ハタメク)か」。六受戒の功德であることが強調される。蟹報恩説話であるとともに、不殺生戒を守り放生したために利益を得た説話であることが、示される。六その姓名の人は存在しなかった。

第九縁 今昔物語集・二十ノ二十一に書載。

二未詳。本説話以外に所伝をみな。中巻三縁にみえる大伴の一族か。二東京都。二七四九年。二七五〇年。主人公の死より牛への転生までの期間は、中国説話においては、当日(広記・四三四・河内権守)半年(広記・一三四・童安丹)二年(法苑珠林・傳負輪・慈心縁・路伯達)と多様である。三寺物や寺の銭を借用して返さずに死に、体に斑文を有する中に転生した例は、広記・一三四所引異録竹木通、同・一三四所引佛戒錄・傳書言、同・四三四所引宣室志・河内権守、など。寺に關係しない負債の例は、法苑珠林・傳負輪・慈心縁・路伯達、程華、広記・四三四所引原化記・戴文、同・一三四所引報恩縁・童安丹、同・一三四所引王常同話・劉編題、同・一三四所引神祕錄・施注、など。いずれも斑文には前世の名があらわれている。本説話のような長文の例はみえない。

擅にして、恣なる心に随ひて寺の物を借用て報い納めずして死亡ぬ。此の物を償はむが爲の故に牛の身を受くるなり」といふ。茲に諸の眷屬と同僚と、慚愧する心を発して、慚ること極り無くして、謂はく「罪を作ること恐るべし。あに報無かるべけむや。此の事季の葉の楷模に録すべし」といふ。故に同じき年の六月の一日に諸人に伝ふ。冀はくは、慚愧無き者斯の録を覽て心を改め善を行ひ、むしろ飢の苦に迫められ銅の湯を飲むとも、寺の物を食まされ。古人の諺に曰はく「現在の甘露は、未来の鉄丸なり」といふは、其れ斯れを謂ふなり。誠に知る、因果無きにあらず、怖り慎まざらむや、と。所以に大集經に云はく「僧の物を盗むときは、罪五逆に過ぐ」とのたまふ。

常に鳥の卵を煮て食ひて現に悪しき死の報を得る縁

第十

和泉国和泉郡下痛間村に、一の中男有り。姓名詳ならず。天年邪見にして因果を信はず。常に鳥の卵を求め、煮て食ふことを業とす。天平勝宝六年甲午の春三月に、知らぬ兵士来りて中男に告げて言はく「国司召すなり」

といふ。兵士の腰を見れば四尺の札を負ふ。すなはち副ひて共に往き、^{一〇}織郡の内に山直里に至れば、表畠に押入らる。畠一町余に差二尺ばかり生ふ。眼には燭火を見、足を踐むこと問無く、畠の内を走廻りて叫び哭きて曰はく「熱きかな。熱きかな」といふ。時に当村の人有り。山に入りて薪を拾ふ。走り廻りて哭き叫ぶ人を見て山より下り来り、執りて引く。拒みて引かれず、なほ強ひて追ひ捉へ、すなはち籬の外より牽きて出す。地に踞れて臥し、嘿然して曰はず。良久にありて蘇り起き、然うして病み叫びて言はく「痛、足」といふ。山人問ひて言はく「何故を然らする」といふ。答へて曰はく「一^{一五}の兵士有り。我れを召して将て来りて燭火に押入る。足を焼くこと煮るが如し。四方を見れば、みな火の山に衝まれ、出づる所の間無し。故に叫び走り廻る」といふ。山人聞きて袴を褰げ膊を見れば、膊の肉爛銷り、其の骨環在る。ただ一日を還て死ぬ。誠に知る、地獄は現に在り因果を信ふべし、鳥の如くあるべからず、鳥は己が兒を慈ひて他兒を食ふ、慈悲無き者は人なりといふとも鳥の如し、と。涅槃經に云はく「また人と獸との尊と卑との差別ありといふとも、命を宝び死を重ることは一俱に異なること無し」とのたまふ。善惡因果經に云はく「今の身に鶏の子を焼煮は、死にて灰河地獄に墮ちむ」とのたまふは、其れ斯

一のつとるべき型。模範。通説では「かたき」は型木の意。『さ』が木の意であるかいか、再考の余地がある。二本説話には日時が詳細に記述されている。すでに文書となつていたので詳細な日時が記載されていなかったのであろう。原文「故に二年六月一日」曰「平諸人」云。上卷三十縁の頭録流布也」と同様、文書にされてひろめられたのであろう。日本霊異録には「録頭靈験之簿」とみえる。寺には、仏や寺の刻験、功德の出来事を記録し告知する紙や札板がはられ、たり懸けられていたか(辻英子)。二本説話。上文にみえる六月一日の文書ではない。上卷三十縁は經の文として同文を引用。本説話と上卷三十縁とに因果応報の実例を記した文書が發見する、といふ共通の性格より推測すれば、この文は、それらの文書に記される定期句であつたろう。上卷三十縁。三諸縁要集・思慎部・眞過縁所引の大集經・濟龍品のことき本文(大方等本集經・日藏分・三摩濟龍品の本文とは異なる)の取意。本説話の引用文と同文のものが、梵網經古迹記・下本に「大集」として引用。

第十縁 惡業についての現報説話。今昔物語集・二十ノ二十に書承。

大阪府泉大津市。セ戸令によれば十七歳以上二十歳以下の男。へ七五四四年。木簡(東野治之)。四尺の長さは異様だが、後代の絵圖や彫刻において冥官が長尺の本簡を持った姿に表現されていることが、東野治之によつて指摘されている。冥界からの使者が文書を所持していた例に、金剛般若經・維摩經・延壽集所引金剛般若經・靈驗記・纂要文策・文懷、伝記・一二四所引報心録・王簡見・符應、同・三八一所引伝異記・裴齡・傳・薛・薛・帖、がある。二郡内に

到着して山直里に到着するとすく、表畠に押し入れられた。「織」は、「一」と同時に、の意。原文「纏至郡内於山直里」。まず本地域について記述し、その一部分である小地域について細述する。後代の和文に「一」に「一」として「一」を重ねた表現がみえるが、その源流に位置する表現と考へて、ここでは「一」に「一」と訓読する。二一岸和田市。二原文眼見燭火二は、効果的な説話展開という観点からいへば、この箇所には不要。三卵を食した者が冥界で焼き苦しめられる例に、罪業伝説教化地獄経、法苑珠林・十惡篇・殺生部・惡心縁所引靈報指遺錄・齊士望、伝記・二三三所引玉泉子・陳季貞、があり、冥界ではなくこの世で焼き苦しめられる例に、冥報記下・廣州小兒、がある。本来は冥界での刑罰として伝承されたものであろう。本説話には冥界とのむすびつきが明示されないが、下文には「地獄現在、信因果」とみえる。四あ、足。本説話は村名の起原説話の性格をも有したか。三三中男の眼に映じた事実が述べられる。二鳥卵が受けたのと同じ苦を、中男は受ける。ここでは「焼」と「煮」とが区別されている。「煮」は名義抄では、「ニル、イル、ヤク、などの訓があり、調理用語といふべきであらう。「焼」は調理用語とはいへない。二一卵を食した者が焼き苦しめられる、という刑罰は「地獄」で受ける罰である。冥界で受ける罰である、という前提での記述。上文の「天年邪見、不信因果」と合わせて考へるならば、本来ならば死後に地獄で受苦するはずが当人が因果を信じなかつたために受苦の時期を早めて現在世で受苦した、という説話として本説話が解されていたと考えられる。冥界での受苦ではなくこの世での受苦として述べられている冥報記下・廣州小兒